

がいい”といわれて警察にきた」という人がいました。

私はこの光景がとても不思議に思えました。保健所が「なぜ暴れたのだろうか？」という視点で相談者の話を聞けなかったのだろうか、という不思議さです。事実こうして他の行政が相談者を警察へ回してくるケースは多々あると多くの警察官は言います。これは他行政窓口が開いている昼間のケースでしたが、夜間はその保健所も福祉事務所もやっていないので、ときには相談者の対応で追われ、警察の本来業務である事件の解決の人手までとられてしまっているのです。

そうした現状を目の前にして、24時間対応の精神科救急相談窓口とソフト救急医療、ハード救急医療の確立の他に保健所等公的な機関の24時間体制のサービスが必要だと思います。地域で孤立して事件を起こすようなことにならないためにも。

今、重大事件が発生すると、交番の警察官まで特別捜査本部に人手を取られるそうです。そうしたなかでも、神奈川県警には年間約100万件の110番通報があり、その他に、“警察相談”が始まった2001(平13)年6月～10月の扱いは1万5,641件にもものほります。一方、保護も2000(平12)年度1年間で1万6,562件に達し、そのうち精神障害関係が2,070件で、衛生行政統計では約3分の1が警察官通報になっています。

この他に数字に入っていないようなことは多々あり、ある県警幹部は「自助、共助、公助の精神が大事ですが…」

と言っていました、本当にそのとおりだと思います。本人も家族もピアサポートをやって、地域は「あそこにおかしな人がいる…」等とうわさをしていっているのではなく、日頃から「こんにちは！」といえる環境をつくること。それでもできないことは公にお願いします。その公の最後の砦だと思われる警察が今や24時間コンビニ化しています。多くの警察官の話を聞いて、警察官の平均寿命が短いと知り、このままでは県民の安全も危ういと感じました。

おわりに

'98(平10)年夏、神奈川県警伊勢佐木署生活安全課長の五味さんに出会ったことで、私は患者等が警察署の保護室等で保護されていると知って驚きました。それをきっかけに、あちこちの交番や警察署の人に話を聞いたところ「精神の人の相談が多くて…」等という話を聞きました。

'99(平11)年5月、神奈川県警本部生活安全総務課の山口さんを訪ねて「警察と精神障害者の関係」を聞いたところ、「所轄警察署にいた時、多くの患者さんやご家族がみえましたが…」と絶句され、なんで保健所や医療機関でもない警察に患者や家族が行くのか？と私は不思議に思いました。

横浜市消防局救急課を訪ねたら、「救急隊も精神障害の人は受診先がなくて困っている」と言います。そこで救急課の吉村さんと2人で県警本部に山口さんを訪ね、3者で意見交換しました

が、あらためて“24時間精神科救急相談窓口”や“24時間救急医療”がないことで、患者も家族も救急隊も警察も困っていることがはっきりしました。

神奈川県と市民団体との話し合いの席上で、私はそうした事実を発言し続けてきたら、2000(平12)年に“神奈川県精神科救急医療システム検討会”ができました。私は「多くのニーズを発言したいので、検討会に入れてほしい」と県に言いました。その頃「県警の山口さんが“検討会に救急医療のニーズを持ったコンシューマーや家族を入れるべき”と県にアドバイスした」と関係者から聞きました。しかし県は、ソフト救急のニーズを持った人を検討会に入れませんでした。

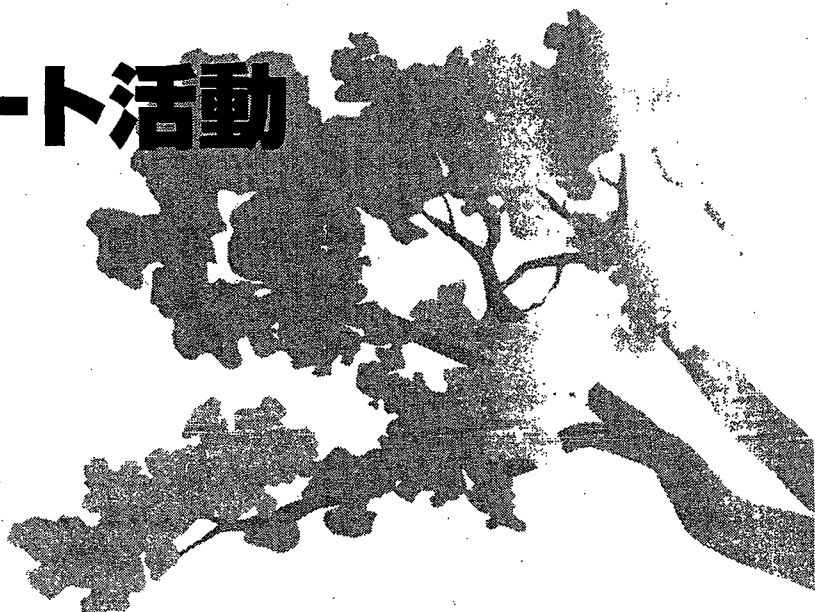
2002(平14)年4月1日から、神奈川県・横浜市・川崎市は、ハード救急を24時間システムにします。ソフト救急は24時間対応にならずにハード救急だけが始まることになりました。これは風邪をこじらせ、肺炎にならなければ受診できないことと同じで、県民にとって人道上の問題だと思います。

そして編集後記にも書きましたが、警察とマスコミと精神障害者の不幸な関係の解消になるわけでもありません。1日も早く24時間安心して利用できる精神科医療が必要です。

(ひろた かずこ)



私のピアサポート活動



広田和子

精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー



社会のなかで生きづらさを感じている人へのピアサポートを地域で行い見えてくるのは、横並びの人と人としてのつながり、信頼感によって心を開ける相手がいることの大切さだ。サバイバー&コンシューマーの視点からの報告。

はじめに

精神科救急のテーマでピアサポートを書くにあたりまして、この文章のなかでいうところのピアや、これから使用するカタカナの用語について私の体験に基づいて私見を述べます。

かつて私は出社拒否という状態で、社会のなかで孤立しているという自覚もないまま精神病院を利用しました。

5年後に医療過誤の注射を打たれたためにその副作用で緊急入院を体験し、退院後も多量の薬をのまないで一睡もできず、薬をのんでも音がすれば眠れないという、“精神医療を利用したため”障害者にされました。このように遅れている精神医療でつらい体験をして地域社会へ生還し、社会的復権を果

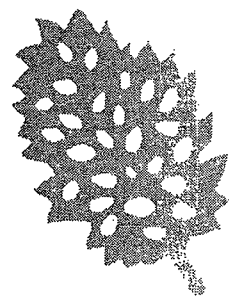
たせた者として、私は「精神医療サバイバー」と名乗っています。

「保健福祉コンシューマー」とは、保健所や作業所、生活支援センター等の社会資源や精神障害者のためのサービスや制度の消費者および消費経験者のことをいいます。私は精神病院へ通院後、保健所の“生活教室”へ週一度通所したり、病院を退院後、作業所のメンバーになったり、2年前からは“横浜市精神障害者住み替え住宅制度”を使っていますので、この呼称をつくり、使用しています。

この呼称をつくったきっかけは救急車等で安心して利用できる“精神科救急”の24時間システムを早期に実現してほしい等と横浜市障害者施策推進協議会のなかで発言していたことでした。

そのときの私の発言が職員の意識を変えてしまうほどの影響力だということで、ケアマネジメント専門委員会の委員選考から私が外されたことと横浜市の関係者から聞きました。そこで、委員に選ばれた人に、数回開かれる委員会に2、3回私を出させてほしいとお願いしたところ、ものすごい剣幕で怒鳴られ、その人に怒鳴られて自殺した仲間の亡霊が決まって真夜中の3時に出て、3回短期入院したほど体調をくずしました。

こうして患者会のなかでもつらい体験をした私の考える“ピア”は単に精神障害者にとどまらず、社会のなかで生きづらさをもっている“社会的障害



者”または生きづらさを感じている人と捉えています。

不登校だったE君は…

’99(平11)年12月8日に横浜市内の教職員400人に講演したあと、ある女性教師から「息子が不登校で…」という相談電話を受けました。私は「息子さんと一緒にちゃんこ鍋でも食べませんか」と提案しました。

当時12歳のE君が両親とともにやって来ました。ちゃんこ鍋を食べながら、テレビ番組の“はみだし刑事純情系”の話でE君と私は意気投合しました。「はみだし」のビデオがあるから泊まり込みで見に来ない？」と私が言うと、E君は「はい。広田先生」と言いました。母親から「Eは強迫神経症で、汚いと思った瞬間にお風呂に入るのが」と言われたのですが、私は「何度でもどうぞ」と答えました。

E君が泊りに来た日、2人で“はみだし”のビデオを5本見て「…どうして強迫神経症になったの？」と聞くと、「学校で嫌いな女の子がいじめられていて、嫌いだけれどいじめはよくないと思っていたら、学校に行けなくなって…」とE君は語りました。その時点でE君は精神科からでている薬をのんでいました。E君は我が家でテレビをつけられなかったし、冷蔵庫も開けられなかったけれど、一度もお風呂には入りませんでした。

翌日「世界一おいしいさば寿司を食べに行こう」と言って、おなじみのお寿司屋さんへ一緒に行き、さば寿司を食べると「…本当に世界一のさば寿司ですね」とE君は言いました。

そして六ツ川交番へ寄って「F君！この子“はみだし刑事”の大ファンなので握手してあげて」と33歳のF警察官にお願いすると、「こんにちは！Fです」と言って握手してくれて、E君はニコニコして帰って行きました。

その後、E君は何度もさば寿司を食べに来て、フリースクールへ通いだし、2001(平13)年4月から学校へ復学したので、E君一家とちゃんこ鍋を食べて“復学祝い”をしました。

先日、E君は「強迫神経症の原因は家にあった。家がきれいなので、それが普通だと思っていた」しかし我が家が汚かったので、「これが普通なのだと思います」と話していました。なるほどそれで、E君は我が家でお風呂に入らなかったわけです。汚い連続性のなかにいたのですから。

E君は「日本の精神医療で心の病は治らない。大事なのは何が原因でこうなったのかよく考えることです」と語りましたが、私もサバイバーとして同感です。今、E君は来年の高校受験めざしてガンバッテいます。

夜遅くかかってくる電話ほど深刻

夜遅くかかってくる電話ほど話の内容は深刻なものが多いと感じています。

G君は私を信頼して日頃から電話をくれる間柄。ある夜午前0時頃、G君の母親から「Gが幻聴がひどくて苦しいのですぐ入院したいといっています。…〇〇病院へ電話をしましたが当直の先生は寝ているといわれた」とのこと。

私は母親に「G君にかわってください」とお願いすると、G君がでたので「大変だけど、今晚はもうどこも診てくれるところがないので布団をかぶって幻聴と話し合うか、闘ってほしい。そして明日、病院か保健所へ自分のつらさを訴えて…」と話したところ、G君はその後、自分の意思で通院先の病院へ入院しました。

ピアサポートは重要な活動

今回、私がここでご紹介したピアサポートは自宅におけるマンツーマンのかかわりです。患者会のことにも冒頭でふれましたが、私自身は現在もその患者会に所属しているし、今後もやめる気持ちはありません。人が集まればいろいろな問題が発生します。そのなかで集団だからこそより孤立感を感じることは誰にもあるでしょう。そう感じるからこそ、マンツーマンのピアサポートが重要だと、かつて社会のなかで孤立しサバイバー&コンシューマーになった者として捉えています。

(ひろた かずこ)

池田小児童殺傷事件取材を受けて

2001〈平13〉年6月8日午後、2日前に亡くなった母のお通夜の打ち合わせをしていると、神奈川新聞のA君から「大変なことが起きましたね」という電話が入った。私が「何があったの?」と聞くと、「知らないんです。大阪の小学校に精神障害者が乱入して生徒を刺傷したと今テレビでやっていますよ」と言われた。

急いでテレビをつけると、その時点で5人も幼い子どもさんが亡くなったことを知り、言葉が失った。A君に「ごらんになりましたか?」と聞かれたので、「こちらは大変なのよ」と言い、母がおととい亡くなったとつげると、A君は間をおいてしみりと「それはご愁傷様です。お通夜が告別式にお焼香させていただきます。…このような時に申し訳ありませんが、どうしても広田さんのコメントをいただきたいのですが…」と言った。A君とはよく精神障害者の事件報道のあり方とか精神医療保健福祉の業界のことなどを話している。「マスコミは権力だから」と言う私に「マスコミは権力だけど私は無力感を感じています」とA君は本音を語る間柄。A君に私は日頃考えている普遍的な話を手短にした。

その後、お通夜をはさんで産経新聞のB君から電話が入ったので、神奈川新聞にコメントしたことと同じ話をして、「念のため記事になる前に私のコメントの部分を知らせてほしい」とお願いした。

B君の返事を待っていると、今度は朝日新聞のCさんという人から「うちの〇〇の紹介で、ぜひ広田さんのコメントが…」と電話が入った。私はまた同じ話をして「記事になる前に知らせてほしい」とお願いした。

B君の電話で翌日のコメントの確認がとれ、

弟が「帰ろう」と言ったので、私は明日の告別式のため薬をのんで寝なければいけないと思って、弟に送ってもらいドラマのような1日を振り返っていると、朝日新聞のCさんから「うちの社は匿名報道をしていますので、広田さんのコメントは使わせていただかなくてもよくなりました」という電話が入った。

翌9日、母の告別式の日、神奈川新聞と産経新聞にコメントが載ったことをA君とB君の電話で知った。告別式を終えて初七日の法事もすませて家に帰り一休みしていると、朝日



新聞のCさんから「…うちも実名報道でしたので、昨日の広田さんのコメントを使わせていただきたいのですが、広田さんが「医療的保護を受けながら起訴され裁かれたい」と言ったところに、デスクが「被害者の感情に配慮して」と手を入れたいと言っているのですが、よろしいでしょうか」と電話が入った。

「…おたくは朝日新聞じゃないのですか。私は他の病気と同じように、と言ったんですよ。デスクに言ってください。いつから朝日は週刊誌みたいになったんですか。もしどうしてもデスクが手を入れるのなら、私のコメント

は使わないでください」と言ったところ、夜遅く「デスクが広田さんのお話を了解しました」とCさんより電話が入った。

Cさんと激しいやり取りがある前に、11年間交流のある東京新聞のD君から電話が入った。私は長年の親しさから「…精神障害者の施策について国に謝罪してほしいと思っている…」とコメントにつけたした。

そのことを精神医療保健福祉業界人ではない親しい人に話したところ、「広田さん! 今、謝罪されるのは被害者ですよ! 広田さんの気持ちは理解していますが、今はその時ではない。世論を敵に回してしまいますよ」と言われた。私はそのアドバイスを受けてD君に「国の謝罪のところをカットして!」と電話を入ると、D君は「だって、広田さん! 国はハンセン病の人たちに謝罪したじゃないですか。カットしなくてもいいんじゃないですか」と言った。私は「さすがD君! 全くその通りなんだけど、今はタイミングがよくないよ。時間をおこなければ」と言うと、D君は「わかりました」と言った。

そして日本テレビの収録やアエラ、産経新聞のロングインタビューに応じたり、読売新聞の取材や毎日新聞にもコメントを求められ、それらの一つひとつに丁寧に対応したが、遠方の毎日放送や「SPA!」はお断りした。

その後、厚生労働省より「法務省との重大事件を起こした精神障害者に関する合同検討委員会」の参考人として招かれ、サバイバーとして決死の覚悟で発言する決意をしたが、多くのさまざまな立場の人のいろいろな反対等にあい参考人を断念した。参考人として発言したかったことは今後、文章化していきたいと思っている。